

低湿地、酸性土に向く

アルサイク・クロバーの栽培

安孫子 六郎

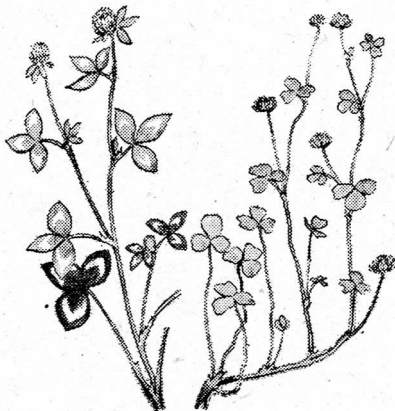
クロバーの種類はすこぶる多いけれども低湿地、酸性土によくできるクロバーは少い。アルサイク・クロバー (*Trifolium hybridum* L.) は現在のところ唯一のものであろう。最近ようやく識者の注目を引き普及も目覚ましいものがあるので栽培の概要を述べたい。

アルサイク・クロバーは赤クロバーと白クロバーの中間的性状を呈しているが両者の雑種ではない。北欧スウェーデンのアルサイク村が原産地といわれており、北方のやや冷涼な気候風土のもとに繁茂した牧草である。わが国には明治初年に輸入せられ古くより北海道の路傍には野生状態で散見されている。

◎性状 茎は赤クロバーより細く毛がなく平滑であり斜生する分枝が多い。葉は濃緑色、楕円形であり葉面に斑紋を欠く。単作するときには倒伏する。草丈は条件のよいところでは三尺〜四尺に達し、禾本科牧草などと混播すると倒伏を防げる。

花は逐次分枝した各枝先に頭花をつけ桃色で、白クロバーよりやや大きい。花管が短いので蜂類の吸蜜に適し養蜂上はなほは有用な蜜源になる。根は浅く軽鬆土や乾燥

地では夏の乾燥に弱いが耐湿性はなほは強く長期の冠水などにもいちじるしくたえる特性を有している。農業技術研究所の山田、吉原両技官によつて本種が耐湿性の強いことを生理学的に証明され、江原博士も耐湿の強い点を早くより指摘されている。また、耐病性も強く、赤クロバーが銹病、



炭疽病、煤点病などに犯されるに反し、これらの病気はアルサイククロバーには発生しない。赤クロバーでは開花期前後からこれらの病害により下葉から黒変枯死する場が多いが、アルサイククロバーでは開花期間が赤クロバーより長い上に、かかる病

害により葉が枯れることがないため、刈りおかれても損失も少く、質のよい青草をうるることができる。またいまのところレンゲ、赤クロバーに発生する菌核病も認められない。

◎生存年限 このクロバーは適地にては三年〜四年は生存を続けるが暖地では一年生として取扱うべきと思われる。すなわち秋播きして越冬し翌春収穫となるが、夏は暑さのため衰弱し経済的の価値がないほど収量が落ちるからである。水田の裏作などに栽培する場合はもちろん一年生として取扱うことになるのであるが畑地でも二年生あるいは三年生の残存株はあるが生育は不振であるから寒地でも最高収量のある二年目を利用し、年々更新が望ましい。

生育開花状況

(左)赤クロバー (右)アルサイククロバー
混播牧草地などでは結実した種子が脱落して発芽生長して一見永年性のごとき観を呈する。
◎氣候と土壤 原産地の氣候は冷涼であるから耐寒性、越冬性が強く、東北方の積雪地帯でもレンゲや他のクロバー類と比較して越冬性の強いことが発表されている。
雪の少ない地帯でも越冬性が強く北海道釧路方面のごとく雪が少なく寒気の酷しい地帯でよく越冬し収量の多い事実を認められている。高冷地などで夏季低温で霧のかかるような地帯には好適する。

土壌については適応性が広く他のクロバー類の生育不振な強粘土、低湿地、酸性土によく越冬生育できることは最も優れた特

性である。府県の暖地ではこの特性を取り上げて排水不良な畑地、レンゲの作り得ない半湿地、畦畔草などに最近非常な勢いで栽培されて来た。

とくに水田裏作として飼料緑肥用に栽培するときはこの草の耐暑性の弱いことはまつたく問題にならず不良土や低湿地によくできる特点のみを生かすことができるのである。この草は元來重粘土、泥炭土などの理化学性が悪く酸度の土地によく生育し、軽鬆な土には生育は概して不振であるが、かかる土地でも低湿地では相当の成績を示す。当場の実験では秋播にて草丈二尺五寸反当り収量一回刈で九百九十貫(六月七日調査)の実例がある。二番刈は三百貫に過ぎなかつたが他の牧草類とくに「まめ科牧草」の生育不良な土地でこの成績は土地利用上注目し値するものと思われる。

この草は不良土によく生育するが、排水不良地には排水を行い、酸性土には石灰を与え、堆肥を施し、泥炭地には客土を行うなどの改良を加えればさらに一層の増収をみることはいうまでもないことである。

多年赤クロバーを連作して「忌地」を起している土地や畦畔草として利用すれば非常に結果がよい。

◎種子 は微細で暗緑色である。一升粒数は約二百万余であり一升重量は約三百六十匁ある。

◎栽培法 このクロバーは採種を目的としない場合は畑地では単播することは稀であつてまめ科の「赤クロバー」「スイートクロバー」「ラデノクロバー」いね科の「チモ

「オーチャード」「ブロームグラス」などと混播される。

寒地では主としてチモシーなどが混播の相手となる。

暖地では「リードキャナリィグラス」「レッドトップ」「ケンタッキー31フェスク」「トルオートグラス」などと混播するを適当とするが、いずれも牧草地を作る場合であつて水田裏作としては単播することが普通である。

水田裏作としての適否を昭和二十六年秋に第一表の一府二県の農試に依頼して検討を願つたところ中間報告として第一表のと

第一表

試験せる場所	試験地の概況	播種期	発芽	越冬	開花期	收穫	收穫期の草丈	收穫期の生草	水田裏作としての今後の見通し
福岡県築紫郡二日市町	乾田(稍湿潤)	10月3日	否	良	5月6日	5月31日	42.5	76.7	適
京都府桑田郡龜岡町	半湿田	10月3日	中	中	6月上旬	6月3日	1	96	適
岡山 山 市	乾田	10月5日	良	良	6月6日	6月6日	24	55	適

おりの成績を得た。いずれも耐湿性強くレンジの引續不良な半湿田その他に有望なることが認められた。

◎播種期と播種法 寒地では主として春播きを行う。札幌附近を標準として四月下旬～五月中下旬ころまで、暖地では主として秋播を行い北関東を標準として九月上旬～十月上旬までを適当とする。発芽温度は最低摂氏五度と称せられている。秋播は春播に比して雑草に負けず取量も多いが初霜前四十日以前に播くことが肝要である。水田裏作の場合は稲の立毛中に中播を行うことにより越冬をよくすることができる。

寒地では春播が主となるが燕麦などと混播して雑草を抑えアルサイクを保護する方法がよい。麦類の播種量は普通の場合より三～四割減じて播かないとかえつてアルサイクに日蔭を与え初夏には水分を争い成績が不良になる。これは瘠薄な土壤においていちじるしいから、施肥に注意するか、麦類の子実は収穫せず青刈飼料とする方がよろしい。普通の土壤では春あまり播きおくりしない限りたいした失敗はない。

暖地では水田裏作を主とするが、落水後田面があまりに乾燥しない前に撒播するかまたは稲株の脇に穀粒ずつ点播する。点播

は種子の節約ができる。畑地に播く場合は二尺前後に畦立して条播しその後三週間ぐらゐを経てアルサイクがよく揃つたとき畦間に他のいね科牧草を条播して採草地を作るとよい。いずれの場合でも注意すべきは覆土を浅くすることで深い覆土は最も悪い。種子がかくれる程度を限度とすることである。

◎播種量 撒播の場合は反当り二ポンド～三ポンド(約六合六勺～一升)条播の場合は撒播の三分の一で十分であり、点播の場合は五分の一ぐらゐで十分である。発芽もきわめてよく硬粒種も少ない。

◎肥料 アルサイクは不良土壤にもできるが肥料が不足でよいわけではない。有機質の不足などには多くの堆肥を施し、酸性土には石灰を入れ、泥炭土には客土などが必要である。一例を示せば中以下の土地では反当り堆肥三百貫、過石(熔燐)五貫、十貫、硫酸(石灰窒素)五貫、六貫、加里二貫～五貫程度を施せばよい。

水田裏作として中播きするときは無肥料



◎利用法

乳牛、豚の飼料として好適である。緑肥としても大いに利用される。

低湿地に向きしかも耐病性のつよい唯一の優良な科牧草として有望である。低湿地の多いわが国では大いに取り上げて利用されるであらう。結実性が高く、自家採種も容易であるから湿潤低地の草

でやり稲を刈取つてから発芽せる上から過石、硫酸、加里を、五、三、二の割合で混合し、これに倍量以上の微細な堆肥か、土と混和して全面に撒布する。

畦畔などに播くときは過石、硫酸、加里混合のものを予め播く場所に撒布しよくレキのごときもので土と混和してその上に播きさらに土を攪拌して覆土を軽く鎮圧しておくのである。

◎收穫 アルサイクは他のクローバーすなわちクリムソンよりは一カ月ぐらゐおそく、赤クローバーよりは一週間ぐらゐおそく収穫されるが、水田裏作としては十分に田植えに間にあう。レンジのごとく早期に収穫して田植えまで雑草の繁茂に苦しむというところが無い。アルサイクは他のクローバーのごとく茎葉の硬化が少ないので、収穫の時期の幅が広い。また乾燥も容易でありサイレージにも利用できる。収量は五百～千貫の間にある。